てんかん患者を救え－ガソリン補給隊のお蔭で任務遂行

国立病院機構西新潟中央病院　薬剤科
関　川　　敬

被災者救援のため、国立病院機構（NHO）の先陣として、先に現地入りしていた名古屋医療センターに続き、当院から笹川睦男臨床研究部長を隊長とした５名の派遣班（北村愛看護師、細川祐子看護師､福島範人事務職と私､関川敬薬剤師）が、当院に集結した静岡てんかんセンター、三重中央病院からのチームとともに16日の夜に現地に向かいました。

当院チームが活動拠点とした山田町は、釜石市から三陸海岸を30km程北上した町ですが、途中の大槌町とともに、報道で見聞きしていた画面からの想像をはるかに超える損壊状態でシャッターをきる手が震えました。山田町の主要避難所となった山田南小学校に診療所を開設し、被災した地元の医師や行政担当者を含め、われわれ３チーム、岩手医大、陸上自衛隊、日赤病院、昭和医大等と協力して、日ごとの地域状況に沿った診療体制をとれるよう、朝と晩に会議を行って、被災者の診察と薬の処方にあたりました。殆どの方が、おくすり手帳も流され飲んでいた薬がよく分からない方が多く、また、持参した薬以外に無かったため、被災した薬局等から供出された津波で海水をかぶった薬を薬剤師、看護師らで協力して夜間にペーパータオルで拭いて、なんとか被災者が日頃飲んでいた薬に相当するものを提供して、一般医薬品の到着を待ちました。てんかん患者さんについては、専門医と薬が必要で、当院の笹川医師と静岡てんかんセンターの小出医師が診療にあたり、被災患者を救う事ができました。

辛かったことは、水と電気が止まっていた事でも－２℃で目が覚める事でもなく、NHOチームが寝食を共にした教室に貼ってあった、日頃からの防災教育を示す掲示物の中の14：40の集団下校の指導と14：51で止まったままの時計、笑顔の子供達の写真と、その下に並んだままのランドセルの子達の安否でした。

最後に、今回の任務を遂行して無事帰還できた一番大きなターニングポイントとなったのは、院長始め施設幹部が燃料補給隊を被災地の釜石市まで派遣してくれた事に尽きます。これにより、静岡・三重も含め３チームが現地での活動を遂げる事ができた事実に感謝し結びの言葉とさせてもらいます。

海水をかぶった薬の拭き取り作業

必死で仕分け作業